ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES

ブラジル特報

BRASIL

No.1657
2020年7月号

特集 ブラジルのイタリア移民パワー

- ブラジルの「イタリア人」
- イタリア移民が豊かにした食文化とファッション
- ブラジル・イタリア・音楽
- サンパウロ工業化とイタリア移民 ～いくつかの企業事例

あの町この町
モンテ・アレグレ Monte Alegre

0円

新規会員募集中！
詳しくは P21 をご覧ください。

一般社団法人 日本ブラジル中央協会
URL http://nipo-brasil.org/ E-mail info@nipo-brasil.org
〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人：大前孝雄／編集人：岸和田仁

世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

鉄道と港湾を一体化させ、物流を効率化。

鉄道網と港湾ターミナルの複合一貫サービスを提供するVLI社に出資参画。
たとえばサントス北西のティプラム港で、取扱貨物を次々と拡大。

[Business innovation-2]

貨車リースで、全土に広がる陸上輸送モデルを確立。

MRCLA社を通じてリース事業を展開。貨車6,000両以上、機関車20両以上で国じゅうを縦横につなぎ、穀物・肥料・鉄鋼製品・燃料などを運搬。物流の安定化に貢献。

[Business innovation-3]

現場のニーズに細やかに応える農薬事業で、農業の発展を。

オウロフィーノ社に出資参画。大規模な農地が多いブラジルで、
気候条件に適した農薬製剤を開発。作物の順調な生育を農薬で支え、
増産や品質向上に貢献。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産

MITSUI & CO.

目　次

あの町この町
モンテ・アレグレ［沼田行雄］ …… 3

ブラジル・ナウ
ブラジリア：ユートピア、それともデストピア？
［鈴木 茂］…… 5

【特集】ブラジルのイタリア移民パワー
ブラジルの「イタリア人」［北村暁夫］ …… 6

【特集】ブラジルのイタリア移民パワー
イタリア移民が豊かにした食文化とファッション
［麻生雅人］ …… 8

【特集】ブラジルのイタリア移民パワー
ブラジル・イタリア・音楽［西林万寿夫］ …… 10

【特集】ブラジルのイタリア移民パワー
サンパウロ工業化とイタリア移民
～いくつかの企業事例［編集部］ …… 11

ブラジル現地報告
移民の出会いを描いたブラジル映画
「私たちがここにいる間」［布施直佐］…… 12

連載・日系企業シリーズ
中央開発㈱とブラジル［山口達朗］…… 13

連載・ビジネス法務の肝
ブラジル倒産法［柏 健吾］ …… 14

連載・税務の勘どころ
政府による COVID-19 緊急対策（税務・労務）
［ヴァルテル・シミズ／吉田幸司］…… 15

エッセイ
新型コロナウィルス制限下に思う～日本とブラジルの在宅学習の今昔
［エウニセ・スエナガ］ …… 16

ウーマン・アイ
ブラジルと日本の文化交流の架け橋に
［石黒マリア春代］ …… 17

ジャーナリストの旅路
コロナ禍の東京に見えたリオ［渡邊雅弘］ …… 17

連載・文化評論
財界人にして文化人リカルド・ブレナンを偲ぶ
～もう一人の Covid19 犠牲者［岸和田仁］ …… 18

最近のブラジル政治経済事情 …… 19

キャンパス・コラム
農業立国の過酷さ［武田翔吾］ …… 19

新刊書紹介 …… 20

連載・ブラジルあれこれ
BRASIL para principiantes(2)
- Introdução ao Código Secreto - …… 20

協会からのお知らせ …… 21

写真＝永武ひかる
「表紙のひとこと」

「リオのセントロ地区、カリオカ駅近くの店のパスタ。ビュッフェの中で、香り立つ品に食指が動く。この日は日系人に誘われたランチ。翌日はアラブ系知人宅で手製のニョッキを堪能。イタリアンがブラジルの旅を彩った。」

永武ひかる：ブラジル撮影約 30 年、著作に写真絵本「世界のともだち３ブラジル」（偕成社）等。www.hikarunphoto.com

あの町、この町

モンテ・アレグレ Monte Alegre

モンテ・アレグレ市は、パラー州西部の中核都市サンタレン市からアマゾン河本流の下流方向約 120 キロに位置する、人口約６万人の静かな町であり、2013 年に在ベレン総領事として訪れたことがある。この町の特徴は、日本との関係が古く強い繋がりがあることと、風光明媚な自然環境に恵まれていること。

日本との関係は、日本人アマゾン移住開始から２年後の 1931 年、南米拓殖会社移住地に最初の開拓団 47 名が入植したことに始まる。事業自身は失敗に終わり、会社は撤退を決め、35 年に農場が閉鎖されたため、移住者たちは転住を余儀なくされ、上野浩爾（こうじ）氏（叙勲者、故人）のみがこの地に止まった。戦後は、いち早く移民が再開され、53 年９月に第１回辻移民 23 家族が到着、ゴム栽培のフォードランディア、ベルテーラなど近隣地区からの転入者も含め 55 年までに 126 家族 800 余名が、更に、60 年代には東京農大出身の青年達も多数入植している。その後の日系社会の定着・発展は、遠隔性・輸送の不便さから営農困難による脱耕者の続出や出稼ぎの影響などもあり、必ずしも順調に進まなかったが、現在（2020 年４月）も、約 20 家族がアサイザール地区など主として地方部で農業を中心に生計を立てている。私の訪問時には日系人が市の農務局長を務めていたなど現地社会の重要な一員であり、1980 年設立のモンテ・アレグレ日伯文化協会の下で、組織的な活動も継続されている。

▲ピラン石の奇岩群

また、モンテの魅力は、その風光明媚な自然環境。州立公園内のセーラ・ダ・ルア（Serra da Lua）遺跡の岸壁画は、１万６千年前の人類の存在を証明するもので、アメリカ大陸原住民の起源を、ベーリング海が陸続きであった時期に移動したモンゴル民族とする定説を覆す考古学上の重要な発見と言われる。また、ピラン石（Pedra de Pilão）は、映画「E.T」のモデルのような形の奇岩で、周囲に広がる奇岩群とそこからのモンテ・アレグレ市街地に広がる風景は神秘的で素晴らしい。そして、この町を訪れた出発の朝、忘れられない思い出は、市街地の最も高い展望台から眼下に望む、モンテ・アレグレの港、青いグランデ湖と緑の氾濫原、その先に続くアマゾン川の雄大で美しい風景である。日系社会の礎を築かれた上野氏も、この風景をこよなく愛しこの地に生涯を捧げたのだろう。

▲セーラ・ダ・ルア遺跡の岸壁画

沼田行雄（協会理事　前トンガ大使）

グローバル人材の採用なら

日経ＨＲは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。
日経ＨＲ独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経ＢＰ社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのＨＲ（Human Resources）情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経アジアリクルーティングフォーラム

2013年8月に第1回フォーラムを開催。毎年、アジア主要国のトップクラス大学で学ぶ現地学生の日本企業就職を支援。各国での企業説明会や、日本で学ぶ外国人留学生のための就職支援など、グローバル人材を求める日本企業のニーズにお応えしています。

NIKKEI ASIAN RECRUITING FORUM

日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経ＢＰ社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。

日経キャリアNET
https://career.nikkei.co.jp/

キャリアコンサルティング（人材紹介）

エグゼクティブ、金融、ＩＴ系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアＮＥＴや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っています。

日経HR NIKKEI HUMAN RESOURCES executive
https://www.nikkeihr.co.jp/executive/

日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体（雑誌・Web・メルマガ・フォーラム）を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。

「日経ビジネス 電子版」
会員数：約260万人

仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES

お問い合わせ　株式会社日経HR　TEL：03-6812-7307　e-mail：webeigyo@nikkeihr.co.jp　https://www.nikkeihr.co.jp

ブラジリア：ユートピア、それともデストピア？

2020年4月21日、ブラジリアは静かに遷都60年を迎えた。国会議事堂を中心に、各省庁のビルが両側に整然と立ち並ぶ首都の心臓部は、いつもなら独立記念日や大統領就任式など、重要な国家行事の舞台となる。10年前の遷都50年の祝賀パレードには、数十万人の観衆が集まった。

言うまでもなく、新コロナ・ウィルス感染拡大のためである。報道によれば、ブラジリアで最初の感染者が確認されたのは3月5日。その後急増し、203人を数えた3月26日、ついにブラジリアを管轄する連邦区政府（GDF）が、4月21日のすべての祝賀行事の中止を発表した。最低90日の「延期」が官報に出た4月2日には、感染者数は370人、前日までに4人が亡くなっていたという。

現代ブラジルを代表する作家ミルトン・ハトゥーンと言えば、故郷マナウスのあるアマゾンを背景に、自身のルーツであるシリア・レバノン人移民コミュニティーの人間模様を巧みに描いた作品で有名である。2017年に邦訳（武田千香訳、水声社）された第4作『エルドラードの孤児』（2008年）のメインテーマはアマゾンの神話的世界であるが、さりげなくシリア・レバノン人移民を登場させている。しかし、2005年の第3作『北部の灰』は、同じアマゾンが舞台でも、そこに描かれる父と子の確執には、1960年代末の軍事独裁体制が深く関わっている。画家を夢見て、最後はドイツに渡るムンドが反発したのは、軍人と付き合い権威主義的な道徳を説く父親であり、高校も軍事政権を擁護する歴史教師との口論から退学させられる。

ハトゥーンの最新作『最も陰鬱な場所』3部作は、軍事政権期に成長していく若者群像を描き話題となっている。これまで第1巻『待たされた夜』（2017年）と第2巻『投影図』（2019年）が出されており、最終巻は2021年1月刊行予定とのことである。ハトゥーンの長編小説は、日記や手紙、メモ書きなどに基づく登場人物の語りで進行してゆくのだが、第2巻までの語り手はマルティンという名の青年である。

第1巻は、1977年暮、パリに亡命してきたマルティンが、10年前のクリスマスを回想する場面から始まる。母とともにサントスの祖父母の家に遊びに行き、そこで祖父から母に愛人がいることを教えられる。サンパウロに帰ると、母は怪しげな画家とともに行方も告げず去っていった。父はサンパウロ大学工学部出身のエンジニアで、ブラジリアの政府系企業で新しい働き口を見つける。1968年初め、16歳のマルティンは、母への思慕を抱きながら、父に連れてられて遷都から8年目の新首都に転居する。

1968年初めのブラジリアは、激動する政治の渦中にあった。しかし、マルティンはもともと学生運動には興味がなく、父は軍事政権を支持し、自分自身の保身のためにも、マルティンが学生運動に感化されることを恐れていた。そうしたマルティンにも、否応なく軍事政権の牙は迫ってきた。ある日、大きな学生集会があった。授業は休みになり映画館に出かけるが、閉まっていたため、混乱する街中を歩いて帰宅する。家では父親が待っていたが、自宅近くのパラノアー湖に一人でボートを漕ぎだす。岸から離れて横になり、母を思い出していたその時、大統領府の警備兵に逮捕される。連行された留置場には、同級生の女の子にひかれて入った演劇サークルの仲間たちも収容されており、拷問の悲鳴を聞きながら一夜を明かす。

1968年12月13日の金曜日は、軍政令第5号（AI-5）が出され、軍事独裁体制が一層強化された。マルティンはブラジリア大学建築学部に入学するが、周りの人々が次々に逮捕されていく。そして、1972年暮、辛くもブラジリアを脱出してサンパウロへたどり着く。

この作品のどこが、読者をひきつけるのだろうか。マルティンと同世代の多くのブラジル人は、自分の青春時代を重ね合わせることができるであろう。マルティンの年齢に近い若い世代は、半世紀前の青年たちの政治意識に共感するものを見出すのであろう。現在のブラジルの政治情勢にも関係があるに違いない。現大統領は、軍人出身で、軍政期を賛美してはばからない。4月から5月にかけて、ウィルス感染対策をめぐって、立て続けに2人の保健相が更迭され、現在その地位にあるのは軍人である。他に7人の軍人が閣僚ポストを占め、中央省庁の任命職に就く軍人は1000人を越えると言われる。まるで軍事独裁体制の亡霊がよみがえったかのようである。

ハトゥーンは、1967年、建築家を目指して15歳で単身マナウスを後にし、高校時代の3年間をブラジリアで過ごした。ユートピアとして建設されたブラジリアは、1964年の軍事クーデターによって弾圧の震源地に変わった、とあるところで語っている。ユートピアとデストピア、ブラジリアは二つの顔を持っているようだ。

鈴木 茂（名古屋外国語大学世界共生学部教授）

ブラジルの「イタリア人」

北村暁夫
（日本女子大学教授）

ブラジルのイタリア系人口

ブラジルには多くのイタリア系住民が暮らしている。移民社会におけるエスニック人口は数え方によっていかようにも増減するので、一つの参考に過ぎないが、3000 万人（約 2 億人の全人口の 15%）とも言われている。

筆者はもともとイタリア近現代史の研究者であり、とりわけ 19 世紀後半から 20 世紀前半の間にイタリアから世界中に移民した人々に関する研究を中心に行ってきた。そうしたなか、立教大学文学部の丸山浩明教授より、ブラジルにおける日系、ドイツ系、イタリア系など、さまざまなエスニック集団に関する比較研究を行うプロジェクトへのお誘いを受け、2016 年 8 月から 9 月にかけて 2 週間あまり、ブラジル南部のパラナ州を中心に研究対象地を確定するための予備調査旅行を行った。そこで、この予備調査の際に知ったこと、考えたことを雑感として記してみたい。丸山教授のプロジェクトは、現在、日本学術振興会科学研究費に基づく共同研究として進行中だが、2018 年と 2019 年に行われたブラジル調査に筆者は諸事情で参加できなかった。ただ一度経験しただけのブラジル滞在で何かを語るのは恐れ多いのだが、その点はご容赦いただきたい。

ブラジルへのイタリア移民史

さて、調査旅行について語る前に、ブラジルにおけるイタリア人の流入の歴史を簡略に振り返っておきたい。19 世紀初頭にブラジルが独立した時期には、すでにイタリアから多くの人々が移住していた。統一の英雄ガリバルディもブラジルに亡命し、リオグランデ・ド・スール州の独立運動を支援した経験を持つ。だ、大量の移民が訪れるのは、1870 年代以降のことである。

イタリアの統計資料によると、1876 年から 1925 年までの 50 年間にブラジルに渡った移民は 129 万人であり、同じ時期のイタリア移民全体の 8%を占める。イタリア国内の出身地域はさまざまで、大きな偏りがないのが特徴である。アメリカ合衆国に渡ったイタリア人は 7 割以上が南イタリア出身であったことと対照的である。他方で、ブラジルの統計資料によると、1881 年から 1915 年に入国した外国人 297 万人のうち、イタリア人は 130 万人（全体の 44%）を占め、ポルトガル人と並ぶ重要な移民集団であった。ブラジルに移民したイタリア人は、大別すると二つのグループに分けられる。

一つはサンパウロ州を中心とするコーヒープランテーションに入植した人々で、出身地はイタリアのさまざまな地域に渡っていた。サンパウロの地方行政府が中心となった斡旋活動がイタリア各地で行われた結果である。だが、コーヒープランテーションでの労働はきわめて過酷なものであったため、1902 年にイタリア政府はブラジルのコーヒープランテーションへの契約移民を禁止する措置をとった。移民の供給地としてのイタリアを失ったプランターたちが次の移民供給地として目を付けたのがアジア、とりわけ日本であった。

もう一つのグループが、パラナ州、サンタカタリーナ州、リオグランデ・ド・スール州の南部三州に開拓者として入植した人々で、その多くが北イタリアの出身者であった。南部三州では既にドイツ人移民を中心とする開拓が 19 世紀前半から行われていたため、イタリア人移民の入植地は標高の比較的高い、農業を行う上で相対的に不利な地域に集中していた。

ブラジルへの調査旅行

既に述べたように、2016 年の調査旅行は研究対象地を確定するための予備的なものであり、パラナ州を中心としていた。なぜパラナ州かというと、丸山教授が二つの移民集団の比較研究（たとえば日本人移民とイタリア人移民など）ではなく、日本人、ドイツ人、イタリア人（あるいは他のヨーロッパ諸国出身者）といった多様な移民集団が隣接して居住する地域を選び、そうした多様な移民集団がいかなる社会を形成しているかを考察することを想定していたからである。サンパウロ州ではドイツ系移民のコミュニティを見出すことは難しく、リオグランデ・ド・スール州では日本人移民のコミュニティを見出すことは難しい。その意味で、パラナ州が最適なのである。

この予備調査旅行は、サンパウロからパラナ州の州都クリチーバまで空路で移動したのち、クリチーバの空港で日本にも留学経験のある若き地理学者のケウトン氏と合流して、ケウトン氏運転の自動車で移動するという形をとった。

イタリア系コミュニティとの最初の出会いは、クリチーバ中心部から 20 キロほど西に向かったサンタフェリシダージという地区（行政上はクリチーバ市）である。この地区は、イタリア料理を中心とした美食の町として知られているようである。1870 年代以降、ヴェーネト地方やトレント地方といったイタリアの北東部からブラジルに入植した人々によって造られた町である（ただし、厳密に言えば、第一次世界大戦前にはトレント地方はオーストリア領であった）。

レストラン・マダロッソの外観▶

◀レストラン内部に飾られた出自を示す絵画

ここでは昼食をとるべくレストランに入ったのだが、「マダロッソ」というその店は最大で 4,600 人を収容できる「世界で二番目に大きいレストラン」という触れ込みであった。豪奢な玄関を入ると、そこには経営者一族の祖先がベッルーノ（ヴェーネト地方北部のアルプス地域に位置する県）から移住したことを示す巨大な絵が飾ってあった。イタリア料理で 4,000 人もの客を一度にさばき切れるものかと訝しく思っていたのだが、その疑問は店のホールに入った瞬間に氷解した。大皿を持ったホール係の人々が、その皿に盛られた単品の料理名を連呼しながら、巨大なホールを歩き回っているのである。「ラザーニャ、ラザーニャ！」とか、「フライドチキン、フライドチキン！」といった具合である。客は自分が食べたいと思う料理の皿を持ったホール係を呼び止め、自分の皿にその料理を盛ってもらうのである。

イタリアではレストランの約束事はそれほど多くはなく、それがイタリア料理の気安さ（たとえばフレンチと比べた時の）につながっていると思う。ただ一つうるさいのが、料理の順序である。イタリア料理では、前菜、プリーモピアット（第一の皿、パスタ類）、セコンドピアット（第二の皿、肉・魚のメインディッシュ）、デザート、コーヒーという順序が厳格に定められており、メインディッシュを食べたあとにパスタを注文するということは決して許されない。つまり、「締めのパスタ」という概念は存在しないのである。

ところが、このレストランでは、料理の順序をめぐる規則は何も存在していない。パスタを食べながら、同時に肉を食べたり、肉を食べたあとで前菜を食べたりしても何の問題もないのである。イタリア人がこの光景を見たら、目を剥いて憤るに違いなかろう。あとで丸山教授に聞いたところでは、こうしたサーブの仕方はシュラスコに似ているという。これには得心がいった。イタリアに起源を持つ料理がブラジル風にアレンジされ、ブラジル風にサーブされる。これは移民文化にしばしば見られるものである。

サンタフェリシダージでは他にも、サンジョゼ教会の敷地内に、サンカルロ会という 19 世紀末以来、イタリア移民を支援する活動を行ってきたカトリックの団体の事務所を見かけ、イタリアとのつながりが今日でも生き続けていることを強く感じた。

その後、この調査旅行では、ボトゥヴェラやホデイオ（いずれもサンタカタリーナ州北部）といったイタリア人によって築かれたコミュニティを訪問した。ボトゥヴェラの郊外には、入植者たちが用いていた水車や製粉の器械、納屋などを遺す一種の博物館的な施設が作られていた。またホデイオでは、1875 年に入植したことを記念する石碑が 100 周年となる 1975 年に建立され、また、町の道路標識がすべて「赤・白・緑」のイタリア国旗で示されているなど、イタリア系であることが誇示されていた。

とはいえ、そうした点を除けば、これらの町がイタリア系住民によって構成されていることを示す要素にあふれていたとは言い難い。もちろん、それほど多くの人と話をしたわけではないし、自宅の中を見せてもらったわけでもなく、あくまで町を外から見た時の印象でしかない。それでも、たとえばドイツ移民が築いたブルメナウやポメロデと

▲ホデイオの
入植 100 周年記念の碑

サンタフェリシダージのサンジョゼ教会▶

いった町と比べると、イタリア的な要素をうかがわせるものが少ないように感じるのである。何よりも重要だと思うのは、「イタリア系」であることを誇示しようとする割には、イタリア語を話せる人がほとんどいないことである。一人だけ、ボトゥヴェラに近い農村で流暢にイタリア語を操る女性と会話することができたのだが、彼女は高校生くらいから自発的にイタリア語の学習を積んだために話すことができるようになったとのことであった。

ブラジルを統合するポルトガル語

ブラジルを訪れて強く感じたことだが、連邦国家であるブラジルは州ごとの多様性がきわめて大きい。南部三州の都市の中には、いわゆる「黒人」をみかけることがほとんどないところもあった。現在のヨーロッパで、これほど「白人」しか見かけない都市を見つけるのは難しいのではないだろうか。他方、アマゾン地域に赴けば、事態は全く逆になるという。これほど州ごとの差異の大きなブラジルを一つの国家としてまとめ上げているものは何かと考えた時、最も重要な要素として思いつくのがポルトガル語の存在である。

イタリア語とポルトガル語が似ていることは確かであり、しかも統一国家が成立した直後にイタリアからブラジルに移住した人々にとっては、そもそも「標準イタリア語」自体が縁遠い存在であった。それゆえ、彼らが比較的短い期間で「イタリア語」を失ってポルトガル語へと移行したことは想像に難くない。ただ、そのことは、筆者のようにポルトガル語を十分に理解できない（文章としては何とか読めるが、音で聞くとほとんど理解できない）人間には、大きなハンディキャップとなる。ポルトガル語能力の向上が、筆者にとって今後の研究を進めていく上での大きな課題となる。これが、予備調査旅行の結論である。

イタリア移民が豊かにした食文化とファッション

麻生雅人
（『メガブラジル』編集長）

ブラジルへのイタリア移民

1880年代頃から急増したイタリアからの移民たちがブラジル人の日常生活に与えている影響はあまりに大きく、暮らしの中に当たり前のように溶け込んでしまっている事例は枚挙にいとまがない。

とりわけ食文化への影響は甚大だ。クリームチーズのカトゥピリ、朝食や軽食でおなじみのモルタデッラ・ソーセージ、ピッツァの定番の具でもあるカラブレーザ・ソーセージ、クリスマスの贈りものに欠かせないパネトーネ……。ポレンタは、肉料理の付け合わせには粥状で、バールで出されるおつまみには揚げたスティックタイプが親しまれている。ミラノ風牛カツレツのミラネーザ（コトレッタ）、牛カツにチーズとトマトソースをたっぷりかけたパルメジアーナ、ラザニアなども、あまりに普遍的過ぎて多くのブラジル人はいちいちそのルーツを意識していないだろう。ワインに関しても、ブラジルではスパークリングワインの人気が高いが、フランスのシャンパーニュと並びプロセッコの知名度が圧倒的に高い。

ポレンタと腸詰

イタリア移民は世界各地に渡り、さまざまな国に多大な影響を及ぼしている。しかし、ブラジルにおけるイタリア文化の浸透には、この国特有の溶け込み方が見受けられる。ひとつは、北部や南部など本国では局地的に伝わる郷土食が、ブラジルでは広く普遍的に浸透した点だ。そして今ひとつは、そのいくつかは現地の食文化と融合して現地化し、独自の発展を遂げている点だ。中には本国イタリアに存在しないものもある。

トウモロコシなどの粉を水などで煮て作るポレンタは、北イタリアで貧困に苦しんでいた農民たちが空腹を癒すために食していた一皿だといわれているが、ヴェーネト州など北イタリアから来た移民たちがブラジルに伝えた。ブラジル人たちは当初はイタリア移民を見下して“ポレンタ野郎”と呼んでいたくらいで、かつては“移民食”くらいの認識だったと思われる。その後、パラナ州のサンタフェリシダージなどイタリア移民の植民地から近いクリチーバにも伝わり、ブラジル人の生活に溶け込んでいった。評論家・歴史学者のウィルソン・マルチンスによると1955年にはパラナ州ではポレンタは一般的になっていたという。今では広く国中で日常的に食されているが、イタリア食というアイデンティティが守られている地域もある。やはりヴェーネト州からの移民が多いエスピリットサント州のヴェンダ・ノヴァ・ド・イミグランチ市では毎年10月にポレンタ祭が行われ、1トンを超える巨大ポレンタが作られ、祭りの来場者にふるまわれている。

パラナ州では鶏肉やリングイッサをポレンタに添えた一皿が広く親しまれているが、リングイッサやソーセージなど腸詰の発展にもイタリア移民の影響は絶大だ。

イタリア北東部エミリア＝ロマーニャ州の州都ボローニャで伝統的に作られているモルタデッラ・ソーセージをブラジルで広めたのは、同地に近いヴェーネト州カステルマッサから移民したジョヴァンニ・セラッチが1932年に創業した肉屋で、ブラジルではセラッチのブランドはモルタデッラの代名詞的な存在だ。今やモルタデッラを使ったサンドイッチは、サンパウロの公営中央市場の名物軽食となっている。ただし、レシピは本国とは異なる。イタリアのモルタデッラに使う肉は豚肉100%で、その他に加えてよいのは脂身、塩、コショウ、にんにく、スパイス類、ピスタチオのかけらなどの規定があるが、ブラジルでは牛肉など豚以外の肉や内臓なども使われる。

ブラジルで現地化した腸詰では、1876年ごろからサンパウロ州にやってきたカラブリア州の移民たちが作ったカラブレーザ・ソーセージも有名だ。カラブリア州にはこれと全く同じものはないという。イタリアで味付けにつかわれるペペロンチーノがブラジルでは入手が容易ではなかったため、よく似たカラブレーザ唐辛子で代用された。玉ねぎといっしょに炒めたり、ピッツァの具として親しまれている。サンパウロで最初にカラブレーザが作られたのはセントロで1937年に開業した肉屋と記録されている。主人のドメニコ・トロッツィはイタリア中部アブルッツォ州の出身だが、ソーセージはイタリア南部カラブリア州コゼンツァ出身の移民の２世だった妻ジゼルダ・カヴァーロのレシピで作られたという。

◀定食屋のランチでも定番メニューのポレンタと鶏肉のプレート

アーティチョークとワイン

イタリアからの移民は、ブラジルの農業の発展や野菜を食べる習慣を根づかせるのにも大きく貢献している。サンパウロなどの市場ではシチリアの名産品として知られるアーティチョークが並んでいるが、国内の生産で90%を占めるのがサンパウロ州のピエダージ市とサンホッキ市で、どちらもイタリアから多くの移民が入植した場所だ。ラディッシュの種をブラジルに持ち込んだのもヴェーネト州からの移民だ。そしてヴェーネト州からの移民がこの国で大きく貢献したのが、ブドウの栽培とワイン造りだ。

ブラジルで初めてワインを作ったのはポルトガル人と思われる。教会の神事のためのものだった。イタリア移民は入植後、ブドウを栽培して家庭用のワインを作り始め、その後ワインを市場へ送り出し、国際品評会で受賞するほどのクオリティに高めた。

1875年にヴェーネト州をはじめ北イタリアからの移民が多く入植したリオグランヂドスウ州のクルジーニャ（現在のヴェント・ゴンサウヴェス市）はブドウとワインと共に発展した地域だ。今ではワイン渓谷と呼ばれているこの地域は、サルトン、ミオーロ、アウローラなどのプレミアム・ワインのブランドを送り出している。

アーティチョークの産地として前述したサンホッキは山間にあり、サンパウロのワインの郷としても知られている。サンホッキに最初にワイン造りを持ち込んだのはポルトガルからの移民だったが、同地にあった大手の繊維工場の働き手としてピエモンテ州から入植したイタリア人移民がワイン造りを発展させた。現在はワイン・ツーリズモで名を馳せている。

ピッツァとパネトーネ

ブラジルにおけるピッツァの聖地が、イタリア移民の影響が大きい南部ではなくサンパウロであるのは、ブラスやビッシーガ、モオカなどの地区にカラブリア州、カンパニア州、プーリア州など南イタリアからの移民が多かったことに起因する。さらには、この国でパン屋の歴史を開拓したのもイタリア移民だ。小麦が手に入りにくいこの国への初期の入植者のポルトガル人たちは、先住民が使っていたマンジョッカ芋の粉でパンや菓子を作ることが多かった。イタリアからの移民が都市部に出て幅広い職業（チーズや腸詰を売る食料や雑貨を売る店、靴屋、仕立て屋など）で活躍をはじめるようになった1860年以降、パン屋が目立ち始めたという。

モオカ地区に今もある名店「ディ・クント」は1878年にナポリから移住してきたドナート・ディ・クントが1896年に開業したパン屋だ。1939年、ブラジルで初めてパネトーネを作った店としても歴史に名を残している。リコッタチーズを使った菓子など、イタリアの味でパウリスタに絶大な人気を誇るこの店はレストラン営業もしており、フェイジョアーダなどブラジル料理と並び、パルメジアーナも自慢の一皿だ。牛カツにトマトソースやチーズをたっぷりかけてグリルしたこの料理はブラジルでは家庭料理としてもおなじみだが、“イタリアにはないイタリア食”の代表格だ。揚げた茄子をトマトソースやチーズでミルフィーユ状に何層にも挟んで焼いたパルミジャーナがブラジルで現地化したと考えられている。パルミジャーナはカンパニア州やシチリア州など南イタリア発祥の郷土料理という説が有力だが、北イタリア発祥説もある。

「ディ・クント」はブラジルにおけるパネトーネのパイオニアではあるが、酵母はイタリアのものではなかった。本国から酵母を持ち込んでブラジルでパネトーネを最初に作ったのは、1948年に北イタリアのピエモンテ州から移民したカルロ・バウドゥッコだ。現在、ブラジルのパネトーネ生産量はイタリア、ペルーに次ぎ世界で３番目に多いが、最も生産量が多い企業はバウドゥッコ社だという（年間に7500万個を生産）。人気が高いのは、干し果物だけでなく、チョコレート味、練乳入りなどブラジル人の嗜好に合わせた現地化したパネトーネだ。

◀バウドゥッコが運営するカフェ店内、看板商品パネトーネとファミリーの写真

革新的ファッション

無論、イタリア移民がブラジル人の生活に及ぼしている影響は食文化だけにもたらされているわけではない。特にファッション面では、常に最新形の変革を与え続けている。例えば、世界で５本の指に入る生産量を誇る靴づくり。その礎を築いたのは職人気質のドイツ移民だが、デザインを発展させたのはイタリア移民だ。ブラジルでは圧倒的に女性靴の市場が活発だが、日本にも輸入されているヴィツェンツァは、その名が示す通り北イタリアにルーツを持つ一家が運営しているブランドだ。また、イタリア系のエリーザ・マルキがサンタカタリーナ州で2015年に創業したオーダーメイド専門の仕立て靴屋Ｅ・マルキは、イタリア仕込みのデザインによるハンドメイドの紳士靴で評判を呼んでいる。

◀E・マルキの靴職人のアタリバさんもイタリア系

スーツの仕立服の需要は、熱帯のこの国では政治家や医師や弁護士など一部の職種にほぼ限られてきた。それでも結婚式にスーツを仕立てる習慣は根強くあるほか、近年、金融業やジェットセッターのビジネスマンの間で再評価されていることもあり、ジャルジンズなどサンパウロの裕福な地区で仕立服が改めて盛り上がりを見せている。ブラジルのアパレル業にはポルトガル移民をはじめシリア系移民、トルコ系移民、ユダヤ系移民など多様な民族がかかわっているが、仕立服における手仕事の技術や仕様には、イタリアの影響は大きい。イタリア移民の仕立て屋ニコラ・コレッラの孫ブルーノ・コレッラは若手の仕立て屋として注目株だ。新世代の仕立て屋アレシャンドリ・ウォン（韓国系）は、スタイルにイタリアの伝統を取り入れている。若き金融業者が旗揚げしたサルトリア・サンパウロが作る仕立服も、ナポリの仕立て文化がベースになっている（仕立て屋を意味する店名でも、ポルトガル語のアウファイアッチではなくイタリア語のサルトリアを名乗っている）。

イタリア移民はブラジルにおいて、その文化を日常的に浸透させる一方で、いつの時代も新たなトレンドを生み出すのにも大きく貢献してきたといえるだろう。

▲サルトリア・サンパウロ、ナポリスタイルのハンドメイドで仕立てられた仮縫いの服

ブラジル・イタリア・音楽

西林万寿夫
（元在サンパウロ総領事、
現国際交流基金ローマ日本文化会館館長）

トスカニーニの劇的デビュー

サンパウロで３年半暮らしローマに来てから２年半となるが、私の趣味がクラシック音楽であるので、音楽を通じた関係について思いつくままに書いてみたい。

最初に頭に浮かんだのは、20 世紀前半を代表するイタリア人指揮者アルトゥーロ・トスカニーニの劇的デビューである。トスカニーニは 1867 年イタリア北部のパルマ生まれ。チェロや作曲を学び地元の音楽院を優秀な成績で卒業後、パルマの歌劇場に就職。次いで南米への巡回歌劇団のチェロ奏者及び補助指揮者として契約を結んだ。1886 年にこの歌劇団がリオデジャネイロでヴェルディの「アイーダ」（1871 年初演）を上演した際、指揮者が無能で引きずり降ろされるという騒ぎとなった。そこで急遽代役としてトスカニーニが指揮台に立ったところ、これが大成功。弱冠 19 歳のトスカニーニは２時間半に及ぶ全曲を暗譜していたのである。この公演が大変な評判となり、その後大指揮者としての道を歩むきっかけとなったエピソードは広く知られている。このように当時ブラジルではイタリアなど欧州からの移民が活躍し、余暇でイタリア文化の神髄とも言うべきイタリアオペラを楽しんでいた事が分かる。望郷の念もあったに違いない。

アマゾナス劇場

アマゾナス劇場についても触れたい。19 世紀後半にゴムのブームで財をなした欧州からの移民は、その潤沢な資金を使って 1896 年マナウスにオペラハウスを建てた。このアマゾナス劇場はイタリア様式の建築物で、イタリア産大理石も使われている。また２階サロンの絵画はイタリア人画家の作品である。当時欧州におけるオペラのオフシーズン（５月～９月頃）に、数多くの歌手や演奏家が大西洋を横断し、ベレンからアマゾン河を１週間かけて遡航してマナウスに渡った。そしてこの劇場でイタリアオペラを中心とする公演を実施し移民を楽しませたのである。この劇場はマナウスの観光スポットの一つとなっており、現在も文化センターの役割を果たしている。私もサンパウロ在勤中訪ねる機会があったが、アマゾンのジャングルの中に立派なオペラハウスが姿を表わし眼を奪われた事を覚えている。

レスピーギのブラジル旅行

ここで是非紹介したい作品がある。イタリア近代を代表する作曲家オットリーノ・レスピーギ（1879～1936）による管弦楽曲「ブラジルの印象」である。この曲は「熱帯の夜」、「ブタンタン」、「歌と踊り」の３つの小品から構成されている。レスピーギは 1927 年にブラジルを旅行しているが、帰国後その印象をもとに組曲を作曲し、翌年サンパウロで初演されている。レスピーギは 1928 年にもブラジルを訪問したので初演に立ち会ったのかも知れない。第１曲「熱帯の夜」は標題こそ暑苦しいものの、むしろ爽やかさを感じさせる曲である。ゆったりとしたハヴァネラのリズムに乗って静寂な夜の情景が広がる。一方第３曲「歌と踊り」は色彩的な曲。金管楽器が活躍しブラジル的陽気さが描かれている。ラテン文化という共通点があるものの、この２曲ではイタリア人作曲家がブラジル的な気分を出そうと色々工夫しているところが興味深い。

その中で異彩を放っているのが第２曲「ブタンタン」。「ブタンタン」はサンパウロ市内モルンビ地区の近くにある世界的に有名な毒蛇研究所（1898 年設立）である。ここでは世界中の毒蛇に対する血清やワクチンの研究・製造が行われており、施設内では毒蛇や毒蜘蛛などを見る事ができる。私はサンパウロ勤務時にモルンビ地区に住んでいたので、この研究所の前を何度か通った事がある。しかし元々蛇が苦手なので残念ながら中に入った事がない。因みに 2015 年には爬虫類にご関心をお持ちの秋篠宮殿下（皇嗣）がこの研究所を訪問されている。さてこの第２曲「ブタンタン」では、コントラファゴットの演奏による毒蛇が這いまわる描写があり、全体に不気味な雰囲気が支配している。また最後には有名なグレゴリオ聖歌「怒りの日」の旋律が弦楽器の演奏で登場し、毒蛇の恐ろしさが表現されている。レスピーギはこの毒蛇研究所を訪れたところ、その印象がよほど強烈だったに違いない。

レスピーギの作品としては、「ローマの泉」、「ローマの松」、「ローマの祭り」のいわゆる「ローマ三部作」が抜群に有名であり、演奏会でしばしば取り上げられている他、何種類ものＣＤが入手できる。これに比べると「ブラジルの印象」の知名度は必ずしも高くない。もっと頻繁に演奏される事を願うものである。

宗像ナオミ女史を偲ぶ

最後に、ある日系人音楽家の逝去について追記したい。その音楽家とは指揮者の宗像ナオミ女史。1957 年、２歳の時に牧師であった父と共にブラジルに移住し、幼少時より父から音楽の手ほどきを受けた。父は 1979 年に帰国したが、ナオミ女史はブラジルに残り音楽の勉強を続け、指揮者として頭角を表わした。私がサンパウロに在勤中（2005 年８月～ 2009 年１月）は、サンパウロ州立交響楽団付属合唱団の指揮者を務めておられ、何度もお目にかかり親しくさせていただいた。近年はサンパウロ市立歌劇場の主席指揮者として活躍されていたという。その日系人社会の誇りともいうべき芸術家が３月下旬新型コロナウィルスに斃れたという知らせが二宮正人サンパウロ大学教授から届いた。日系人で初めてのコロナウィルスによる犠牲者であり、現地の新聞には追悼記事が大きく掲載されたとの事である。この場をお借りして生前のご活躍を偲ぶとともに、心よりご冥福をお祈りしたい。

サンパウロ工業化とイタリア移民 ～いくつかの企業事例

『ブラジル特報』編集部

アブリル出版の
ディズニー漫画雑誌▶

19 世紀末から 20 世紀にかけて、ブラジルの工業化を先導したのはサンパウロ（市＆州）であったが、この工業化は移民、特にイタリア移民のパワーに依存していた。歴史書によれば、20 世紀初頭のサンパウロ工業化の現場（工房レベルから大工場まで）で働く労働者の８割近くがイタリア系であった。すなわち、サンパウロ産業界では資本の側も労働の側も、どちらもイタリア移民が大半を占めていたという時代であった。本欄では、こうしたイタリア移民創業の数多き事例のなかから４つほど選んで略述してみたい。

初期イタリア移民事例 ～Matarazzo財閥の栄光と没落

パウリスタ大通り界隈にあるいくつかのショッピングセンターのなかで一番最近の 2015 年に竣工したのが、「Shopping Cidade São Paulo」だ。日系進出企業のオフィスからもサンパウロ総領事館の入っているビルからも近いので、日系企業駐在員もよく利用している商業施設だが、実は、この場所は1980 年代まで、大富豪マタラゾ家の大邸宅があったところだ。ラード（豚脂）缶詰加工からスタート（創業は 1891 年）して、貿易、製粉、製鉄、繊維、食品、金融などを手掛ける企業群（350 社といわれた）を一代で育てたフランシスコマタラゾ(1854-1937)が亡くなった時、その資産価値は現在の通貨換算で 200 億ドルといわれたほどだったが、この南米最大の財閥も時代の変遷に柔軟に対応できず、三代目（創業者の孫）が引き継いだ 1980 年に和議申請し実質的に倒産、多くの工場は廃墟化してしまった。

事業継続という点ではマタラゾ家は不首尾に終わったが、多彩な人材を輩出した点ではブラジルを代表する家系となった、といえるだろう。なにしろ、政治家（保守派から左翼まで）もいれば、映画監督や歌手もいるのだから。ちなみにイタリア発音では、matarazzo はマタラッツォだが、ブラジルではマタラゾとポルトガル語発音で定着した。

◀ LUPO 社の直営店

オレンジ青果商人からジュース加工最大手へ ～Cutrale

今や全世界のオレンジジュース生産の３割以上のシェアーを有する果汁業界最大手となった Cutrale 社の創業者はイタリア（シチリア）出身のジウゼッピ・クトゥラーレだ。20世紀前半サンパウロ市営市場でオレンジ青果商（当時のオレンジ仕入先はリオだった）として活躍していたが、1956 年には大規模オレンジ栽培へ参入、その二代目ジョゼが事業を引き継いでからは、1967 年サンパウロ州アララクアラ市で経営不振となった果汁工場を買収し濃縮ジュース加工事業に参入、現在は三代目のジョゼ・ルイス（1946 年生まれ）が事業の多角化を推進中で、2004 年には米国（フロリダ）のオレンジ加工工場を、2014 年にはバナナ業界最大手のチキータを買収し、オレンジ以外の青果、果汁、ドライフルーツ加工ビジネスから大豆ビジネスまで戦線拡大中である。

時計商からアパレル大手へ ～靴下Lupo

ブラジルで生活したことのある人ならば、誰しも Lupo 印の靴下や下着にお世話になったはずだ。サンパウロ州アララクアラ市に製造拠点を有する、今や、ブラジルでは最大手のアパレルメーカーとなった Lupo 社の創業は 1921 年だ。のちに創業者となる、11 歳のエンリッケ・ルポ少年が家族と共にサントスに到着したのが 1888 年５月 13 日と、くしくも「奴隷解放令」発布日であった。時計修理商の父親のもとで仕事のイロハを学んだエンリッケは、1921 年靴下縫製に乗り出し、1950 年にはブラジル最大の男性靴下メーカーに成長する。

1990 年代に入って倒産の危機を迎えるが、そこをソフトなリストラで会社再生させたのが、三代目（エンリッケの孫）リリアナ現社長である。アララクアラの地場産業として地歩を固めている。

ディズニー漫画から出版最大手へ ～Abril 出版

ブラジルの出版市場はレアルプラン以降10数年に亘って右肩上がりの成長を続け、書籍類販売金額では、2000 年の16.5 億レアルが 2011 年には 34.4 億レアルとなったが、2013 年に「ブラジルの出版市場は世界第９位になった」のがピークで、その後ダウンサイジングを続けている。その出版業界の苦境を象徴していたのが、アブリル“帝国”とまで称された、ブラジル、いやラテンアメリカで最大のメディアグループ、アブリル出版社が、2018年８月15日、民事更生法を申請した、というニュースだった。負債総額16億レアル（約450億円）は、同社の年間売上高の160%に相当する巨額であり、並行して、800人に及ぶ大量解雇が事前の連絡なしに行われた。総合誌 Veja、経済誌 Exame、スポーツ誌Placar、啓蒙雑誌 SuperInteressante などの主要雑誌は引き続き発行されているが、Elle,Cosmopolitan、Casa Claudia、Boa Forma など 10 誌以上が休刊となった。2019年4月Civita一族は経営権をファビオ・カルヴァリョ氏に全て移譲した。

1950 年ユダヤ系イタリア人 Victor Civita(1907-1990) によって創設されたアブリル出版は、ディズニー漫画雑誌で成功したことから、出版界における新参者にもかかわらず 1970 年代にはブラジルで最大の雑誌メディア事業者となった。二代目 Roberto Civita(1936-2013) の積極的経営方針によって、TV 参入など事業多角化を推進したが、この“過剰投資”が足を引っ張ることになった。ちなみに Civita は、ブラジルではチビタ（イタリア式）よりもシビタと発音されている。

移民の出会いを描いたブラジル映画「私たちがここにいる間」

布施直佐
（『ピンドラーマ』誌編集長）

コロナ感染対応で映画館休業中

ブラジルも３月下旬からずっとコロナウィルスのため映画館がすべて休業しており、新作が観られない状態が続いている。そこで昨年末サンパウロ国際映画祭で上映され本来なら今頃劇場公開されていたはずの作品を紹介する。

「Enquanto Estamos Aqui（私たちがここにいる間）/ 監督：クラリッサ･カンポリーナ Clarissa Campolina、ルイス･プレッティ Luiz Pretti（2019年 77分）」。クラリッサはこれが長編２本目、ルイスは６本目となる。この作品は、二人が６か月間ベルリンに滞在した時に感じた異国の都市・文化に対する違和感、当時ドイツに流入し始めたシリア難民、それに伴って生じた難民受け入れに関する議論から着想を得て創り始められた。

レバノンからニューヨークに移住したばかりの女性（ラミス）がブラジル人男性（ウィルソン、ニューヨークに住んで10年になる）と恋に落ちるが、危篤の父に会うためブラジルに戻るウィルソンといったん別れ、その後しばらくして産まれた息子と共にベルリンに移る ...。

ニューヨーク・ベロオリゾンテ・ベルリンの街並みや二人の住むアパートの部屋の様子の映像と、ラミス･ウィルソン・女性ナレーターが語る声、それに人の話し声・足音・鉄道のレールがきしむ音等の環境音（劇中に流れる音楽も含む）の三つの要素で二人の移民の異国での出会いと別れを二人の姿を一度も見せずに情感豊かに描いた野心作だ。

作家マルグリット･デュラスの影響

両監督は、ニューヨークの街の映像とベルギーの母親からの手紙を読み上げるオフの声で構成された「家からの手紙 / 監督シャンタル･アケルマン（1977年）」が発想の元になったと語っているが、情感を意図的に削り取った同作よりも、同じく二人が参照した、フランスの作家マルグリット・デュラスが監督した「インディア・ソング」「船舶ナイト号」等の諸作品の影響を色濃く受けているように思える。

デュラスの作品では映像とオフの声がズレた状態で重ね合わされたまま同時に進行する。それは、「二つの映画、（つまり）イメージからなる映画であり、複数の声からなる映画」で、また「声は映画の筋の展開を分かりやすくするのではなく逆にそれを妨害し、かき乱してしまう（デュラス）」。

「私たちがここにいる間」では映像と声の他に、デュラスが作中でそれほど展開しなかった環境音が三つめの要素として登場する。足音、人の話し声、隣室から聞こえるテレビの音、教会の鐘の音、鉄道のレールがきしむ音、飛行機のジェット音、車が雨に濡れた舗道を通る音等、慎重に選ばれ質感を調整された一つ一つの音が画面には現れないイメージを次々と喚起してゆく。

そして、デュラスの作品のように声と音が映像をかき乱すのではなく、三つの要素が緩く結合しエモーショナルな時空間を創りあげ、観ている間、まるで暗闇の中大きな河をゆっくり舟で下ってゆくかのような甘美な感覚に包みこまれる。

アラビア語とポルトガル語による郷愁の共鳴

ラミスの声は親しみが伝わる若々しいアラビア語、ウィルソンは異国での長い生活で積み重なった疲れがにじむポルトガル語、女性のナレーションは感情を抑えた低く強く発せられるポルトガル語、と三者の声の調子は異なり、話者が変わると映像のリズムやトーン、街の景色との距離感等も合わせて変わる。特に女性のナレーションはデュラスの作品の声と同じく細切れのテキストを短い間を置きながら読む独自の方法でなされている。例えば、二人が初めて結ばれるシーン。「ラミスとウィルソンは小さなベンチを見つける / 向かう / 冷たい石の上に座る / 二人きり / 強く触れ合い / ラミスは彼のズボンのボタンをはずす、次いで自分のも / 両手がウィルソンの体に / 開いた口 / 鳥肌 / 唾液が口から口へ / ゆっくりと挿入 / 熱い / 小さな痛み / 震え / 脚をもう少し開く / 座り / 息をこらえ / 絶頂に達するまで」。ナレーションと共に、林の中の小道、青々と茂った樹々、異なる角度からの大きな岩の映像と、小川のせせらぎの音が同時に進行し、観ている者はひととき官能的な時空間に浸ることになる。

また、作中に絶妙のタイミングで流れる音楽はいずれも祖国への郷愁や異国での孤独感と結びついており、中でも「記憶の底から少しずつ / メロディーが浮かぶ / 遠い / 子供の頃」というナレーションに続けてアラビア語の男の歌声が地の底から響くように流れる中、ゆっくり走る路面電車の後部から延々と夜のベルリンの通りを映す場面では、ラミスの体の奥深く眠っていた祖国の遠い記憶が歌声と電車の走行に合わせて溢れ出てはまた消えてゆくように感じられる。

一日も早くコロナ騒動が収まり、もう一度映画館の大きなスクリーンでこの作品をじっくり堪能したいものだ。

中央開発㈱とブラジル

山口達朗
（ブラジル中央開発 取締役）

中央開発㈱のブラジルでの取り組み

弊社のブラジル事業の歴史は、1997年からサンパウロにおいて円借款事業のコンサルティング業務を開始したことに始まる。業務の拡大にともない、2003年にサンパウロに現地法人を設立した。以来、弊社は、ブラジルなど南米各国において主に水や農業分野のコンサルティング業務を行ってきている。

中央開発㈱の海外展開とブラジル

総合建設コンサルタント会社である中央開発㈱は1948年に設立され、地質調査や環境調査をはじめとして土木分野の様々な計画・設計、メンテナンスなどに業務範囲を拡げてきている。最近では、特に、大水深の海域での地質調査（傾動自在型試錐工法）、再生可能エネルギー開発、自然災害の調査や早期警報システム開発、地域振興や観光に関する計画づくりなどで、独自の技術による営業活動を行っている。単なる営利追求ではなく、様々な開発の中核になるようにとの思いが社名の由来である。

海外事業については、1973年に海外事業部を設置し、海外では、中南米、東南アジア、アフリカなどで、農業開発、上下水道や河川改修などのインフラ整備などの様々なプロジェクトを展開してきた。最近では、上水道の補修と管理の向上を行う無収水のプロジェクトや、中南米での日系農業者の交流・ビジネス開拓、フードバリューチェーンなどのプロジェクトを行っている。また、独自技術である斜面崩壊を検知するセンサーを用いて、中国、オーストラリア、スリランカ、インド、ブータンなどで土砂災害の防災・減災のトータルサポートに貢献しており、ブラジルでも、後述するリアルタイム遠隔自動監視による斜面モニタリングを予定している。

弊社の海外事業部には、学生時代にブラジルで一年間留学研修をした経験を持つ筆者を含めてブラジルや南米諸国との縁が長い社員が少なくなく、ブラジルへの強い思い入れを感じる。弊社の瀬古一郎社長も、リオデジャネイロで国際コンサルティング・エンジニア連盟（FIDIC）の総会に参加した際に、サンパウロにも立ち寄り、サンパウロ市内上空からプロジェクトサイトの視察を行っている。

日系社会との携わり

農林水産省の「中南米日系農業者等との連携交流・ビジネス創出委託事業」の受託者として、弊社はブラジルをはじめとする中南米の日系農業者との連携の強化、研修や交流事業、日本国内の地方企業などと日系農業者とのビジネス交流の促進、日本との交流や協力の強化を図るための会合の開催などを通じて、日本と中南米の農業・食産業関係者の連携強化、日本企業の中南米進出、日本の農林水産物や食品の輸出促進に取り組んでいる。若手の日系農業者を対象とした交流会議の開催や、日系農業者団体女性部の日本への招へいなども行っている。日系農業者と日本の地方企業などとのビジネス創出のためのビジネスマッチング・セミナーの開催も行っており、日本ブラジル中央協会様にもWEBサイトを通じての事業の幅広い周知などのご協力をいただいている。

◀サンパウロ日本祭りでの国際広報業務

また、一昨年度、環境省の「中南米地域における環境保護に関する国際広報業務」では、サンパウロ日本祭りへの環境省ブースの出展支援を行っており、こうした業務を通じて、これからもブラジルの日系社会との連携を深めてゆきたい。

事業の現状や将来の展望

独立行政法人国際協力機構（ＪＩＣＡ）による「2019年度第２回中小企業･SDGsビジネス支援事業ー案件化調査ー」（中堅企業枠）に応募し、弊社が提案するブラジルにおける「土砂災害等早期警報システムにかかる案件化調査」が採択された。

▲サンパウロ上空からのプロジェクトサイト視察

弊社が、東京大学大学院などとの技術提携によって開発し、SIP（内閣府「戦略的イノベーション創造プログラム」）を通じて発展・向上させてきた傾斜センサーによる斜面崩壊早期警報システムなどの防災モニタリングシステムをブラジルの防災分野の開発課題の解決に貢献するビジネスとして事業化を図り、ブラジルの防災の課題解決に貢献したい。弊社の傾斜センサーを活用した斜面崩壊早期警報システム「感太郎」は、高精度・小型・省電力・低コストで、設置が簡単で斜面のモニタリングが可能である。

今後は、ブラジルにおいて長年かけて培ってきた幅広いネットワークを活かしながら、地域社会に「技術をもって貢献する」ことをモットーに活動し、安全・安心でより豊かな生活を求める人々にとって、あるいは、より活発な社会経済活動を目指す企業や機関にとって、オンリーワンのコンサルタントとなれるように技術開発と事業領域の拡大を図っていくつもりである。

最後に、この原稿を書いている時点では、新型コロナウイルス（COVID-19）が甚大な影響をもたらしておりますが、一日も早い終息を心より願っております。

連載 ビジネス法務の肝

ブラジル倒産法

柏 健吾
（TMI 総合法律事務所日本法弁護士
現在ブラジルで勤務）

1. 経済活動の停止

新型コロナウイルス感染症の拡大防止措置（経済活動の原則禁止など）により、ブラジルの経済も大きな影響を受け、売上の減少から経営危機に陥る会社が増加している。その結果、今後倒産手続を申請する会社も増えると予想される。そこで、本稿では、ブラジルにおける倒産手続の概要を解説する。

2. ブラジル倒産法

企業及び事業活動を行っている個人の倒産手続は、❶破産手続（Falência。以下「破産」）、再生型の手続として、❷裁判上の再生手続（Recuperação Judicial。以下「裁判上再生」）及び❸裁判外の再生手続（Recuperação Extrajudicial。以下「裁判外再生」）の３つがあり、国営企業や金融機関等を除き、いずれも倒産法（2005 年法律第 11,101 号）により規律される。

3. 各手続の概要

(1) 申立権者

破産	裁判上再生	裁判外再生
債務者・債権者	債務者	債務者

(2) 申立要件

破産	裁判上再生	裁判外再生
経済的・財務的危機に陥っていること（未払債務が最低賃金の 40 倍以上の場合などにおいて裁判所は破産決定する）	過去２年間事業活動を行っていること、過去５年間裁判上再生を行っていないことなど	過去２年間事業活動を行っていること、過去５年間裁判上再生を行っていないことなど

(3) 各手続の概要

破産	裁判上再生	裁判外再生
❶破産手続の申請 ❷裁判所による破産決定及び管財人の選任 ❸管財人による債権者及び債権額の確定（債権者は異議申立可能） ❹管財人による財産の処分・裁判所の承認 ❺法定された順位に従い債権者へ支払い ❻一定の要件を満たしたのち債務が免責される	❶再生手続の申請 ❷裁判所による手続開始決定及び管財人の選任 ❸再生計画の提出 ❹債権者（税金等は対象外）による承認（債権の種類に応じて４つのグループに分けられ、各グループの承認が必要。承認の要件は各グループによって異なる） ❺裁判所の承認（上記❹の承認を得られない場合でも、一定の場合には、裁判所は再生計画を承認できる） ❻再生計画の実行	❶裁判外再生の対象となっている債権者（労働債権、税金等は対象外）との間で再生計画に合意する（債権者のグループごとに債権額の５分の３を超える承認が必要） ❷裁判所による再生計画の承認 ❸再生計画の実行

(4) 債権者の地位（担保権の実行、相殺）

破産	裁判上再生	裁判外再生
一部の例外を除き原則として担保権を実行できない。破産決定時点までに期限が到来している債権であれば、不正行為等がない限り相殺可能	一部の例外を除き再生手続開始決定から 180 日間は担保権の実行はできない。相殺については倒産法に規定なし	法律上は債権者の権利行使を制限する規定はない（再生計画に規定することは可能）

(5) 役員の地位

破産	裁判上再生	裁判外再生
役員は経営権を失う。管財人への協力義務に留まる	原則として役員は経営にそのまま関与する（管財人は監督する機能のみ）	原則として役員は経営にそのまま関与する

(6) 労働者の地位

破産	裁判上再生	裁判外再生
解雇される。未払賃金は破産債権となる	ただちに解雇されることはない。未払賃金は再生計画の承認後１年以内に支払われる	特に影響なし

(7) 既存契約の効力

破産	裁判上再生	裁判外再生
契約の維持又は解約を管財人が決定	法律上特に規定なし（契約内容に従う）	法律上特に規定なし（契約内容に従う）

(8) 役員及び株主の責任

破産	裁判上再生	裁判外再生
不正行為等がない限り、破産や再生したことについて役員及び株主は責任を負わない。ただし、労働債務やその他の特別の債務については責任を負う可能性はある。		

4. 詐害行為取消（クローバック）

破産手続の場合、破産手続申請前の行為について、❶取引の相手方が債務者の財務状況を認識している場合、かつ、❷債務者が他の債権者を害する意図がある場合、管財人が取り消すことができる。なお、破産手続申請前の一定期間（90 日を超えない範囲で裁判所が定める）内における、支払期限の到来していない債務の支払いや新たな担保権の設定などは、上記❶及び❷の有無にかかわらず管財人は取り消すことができる。一方、善意の第三者は、引き渡した物の返却等を求めることができる。なお、再生手続については、詐害行為取消の規定はない。

5. 再生計画の実行

財務状況が悪化している会社の再生には新たな資金や不要な事業の売却等が不可欠である。そのため、倒産法は、裁判上再生手続における新たな資金提供者や事業の購入者が不測の不利益を被らないような手当を講じている。まず、新たな金銭貸付（一般的に DIP ファイナンスと言われる）を、特別優先債権として扱い、仮に債務者が破産手続に移行した場合、ほかの債権者に優先して弁済を受けられるようにしている。次に、債務者の事業や資産の売却を容易にするため、事業や資産の購入者が、当該事業や資産に紐づく簿外債務（税務、労務含む）を承継しないこととしている（親会社、子会社等が承継する場合は除く）。なお、裁判外再生の場合には、特別優先債権と扱われる規定や簿外債務を承継しない規定は存在しない。

政府によるCOVID-19緊急対策（税務・労務）

ヴァルテル・シミズ
（KPMG サンパウロ事務所 パートナー）
吉田幸司
（KPMG サンパウロ事務所 パートナー）

2020年5月末現在、新型コロナウイルス (COVID-19) 感染者数はアメリカに次いで世界で２番目に多く、また、COVID-19 の感染拡大は貧困層で広がりを見せており、これから冬の季節となるこのブラジルにおいて心配が尽きないところである。大統領は当初から経済優先を訴えるも多くの州知事は感染拡大防止のために外出自粛要請を５月末までは継続しており、その影響で多くの産業で需要が急減し経済活動の縮小を余儀なくされている。また、ここブラジルは、税負担は高く、税金総額は GDP の凡そ 30% に相当する。政府はこの COVID-19 パンデミック下において事業継続のために企業へ大きな負荷となっている税負担を軽減すべく、十分とは言い切れないものの多くの支援策を公表しており、今回はそのうち代表的なものを紹介したい。

まず政府支援策のなかで最も企業へ影響が大きいと考えられるのが暫定令 936 号（MP 936）であろう。当該令により企業が必要に応じて弾力的に従業員の勤務時間を短縮または雇用契約を一時停止できるようにし、これにより企業は人件費（給与及び社会保障費）を軽減することができる。その他、社会保障負担の１つである「Sistema S」の税率を引き下げ（暫定令 932 号（MP 932））、一部連邦税の納付期限の延期（通達 139 号及び 150 号）などがあり、以下に各施策について簡単に説明したい。

MP936

MP 936は2020 年4月1日より施行されている支援策で、企業の人件費を軽減させ雇用維持を目的としている。適用条件に多少の差異はあるものの中小企業・大手企業を問わず国営企業及び第三セクターを除くすべての企業で適用可能となっており、2020 年 5 月末時点で約 800 万人の従業員に適用されている。当該令では企業は従業員との労働契約の一時停止を最長２か月、または勤務時間の短縮を最長３か月実施することができ、その一時停止及び勤務時間短縮に応じて企業の負担する給料が削減することができる。また、INSS や FGTS などの社会保障費は原則従業員給与を基礎として計算されるため、給与削減に応じてこれらの社会保障費も削減することができる。特に INSS 及び FGTS はそれぞれ 20%、8%と税率が高く他の社会保障費を合わせると法定の社会保障負担費合計は給与に対して35% ～40%程度に及ぶため、当該令による人件費削減効果は大きいと言えるだろう。

なお、従業員の立場を考えると、この制度が適用される場合、失業保険によって減額された給与のうち一部賄われるもののこの期間の手取り給与が減る場合もあり、生活維持が困難になる可能性もある。そのため、企業によっては減額分を補填することもあるが、この補填は、社会保障費の対象外となっており、従業員の手取り給与額が補填により減らなくても企業の社会保障費を減らすことができる。

なお、COVID-19 パンデミックによる経済停滞の影響を受けている企業にとって重要な支援策であるが、上述のとおり適用可能期間が定められており、施行当初から適用した場合、６月末までしか適用できないことになる。経済再開の動きがある中でも新型コロナウイルスの終息が未だに見えず、政府からの追加支援または効力の延長が求められている。

MP932

MP 932は、2020年３月 31 日より施行されている支援策で、社会保障負担の１つである「Sistema S」の負担額を 2020 年４月から６月までの期間、半減するものである。ブラジルでは職業訓練及び従業員への福祉施設を提供する国立機関が９つあり、これらは Sistema S と呼ばれている。これらの機関の運営費は主に企業からの負担金によって賄われている。一般的に、企業は Sistema S の複数の機関への負担金を払っており、その金額は給与に対して約 3% の負担となるところ、当該支援策により 1.8% 程度に軽減される。金額は大きくはないと言えるが企業負担の削減につながっている。

通達 139 号及び 150 号

通達139号は2020年4月3日に、通達150号は通達139 号の適用範囲拡大を目的として 2020 年 4月7日に施行され、INSS、RAT（労働災害リスク負担）、PIS/PASEP 及び COFINS、並びに CPRB（売上を基礎に計算される社会負担金）といった連邦税の納付時期の延期を定めている。同通達により、前述の租税の３月及び４月分の納付期日が８月及び 10 月に延期されている（（注）通達の解釈により延期時期について異なる意見もあり）。これらの租税納付期限の延期は、パンデミック発生の初期段階において企業のキャッシュアウトフロー負担軽減に貢献しているといえるだろう。

現在の COVID-19 感染拡大状況がブラジルでいつ終息するかの見通しが立たないなかで経済再開も議論されている。残念ながら既に多くの企業が倒産している状況から見ると上記の政府支援策が十分であるとは言い難いものの、ブラジル国家の財政状態等を踏まえながら政府として企業が事業継続をできるようにできる限りの支援をしようとする姿勢を感じるところである。何とか COVID-19 感染拡大が収束しブラジル経済が回復に向かっていくことを願うところである。

新型コロナウィルス制限下に思う
日本とブラジルの在宅学習の今昔

エウニセ・スエナガ
（翻訳家、東京工業大学非常勤講師）

2月下旬、新型コロナウィルスの影響で突然３月初日からの休校が発表された。日本の公立小学校に通う娘は当時一年生。休校中は学校から課題が送られてくるので、思いがけず子の勉強と向き合うことになった。

２年生になった４月も休校は続き、５月の連休明けから課題が急に難しくなった。国語の教科書の音読や課題、図工や生活、体育の課題の他、それまで一日に１つだった漢字の書き取りが２つになり、かけ算まで加わったのだ。在宅学習はできる範囲でいいですと先生には言われたが、学校が再開したとき困るといけないと思い、国語と算数を中心に勉強させることにした。九九は教科書や YouTube の動画を頼りに、一緒になって「１ｘ１＝１、１ｘ２＝２…」と復唱した。（尚、娘の小学校は６月１日、短時間授業、分散登校で再開となった。）

思い返せば、ブラジル人日系三世の私は約40年前、幼稚園にも通わずブラジルの小学校に入学する前に、日系二世の母から日本語のひらがなとカタカナ、ポルトガル語のアルファベット、そして日本語の九九を教わったのだった。母もブラジルの小学校に入学する前に、母親（私の祖母）から日本語のひらがなとカタカナ、日本語の九九を教わったそうだ。

約100年前に移民としてブラジルに渡った私の祖父母やその両親は、約５年で日本に帰国する予定だったので、子にポルトガル語ではなく、日本語を教えた。1921年生まれで14歳でブラジルに渡った母方の祖母は、日本である程度学校に通っていたので、学校に通えなかった弟たちに日本語の読み書きを教えたという。父方の祖父母も、昼間は畑仕事をしながら、夜は子どもたちに日本語を教えたそうだ。現代の日本のように、100円ショップで文房具が簡単に手に入り、教育用タブレットやアプリを利用しながら勉強を教えるのとは異なり、電気もない家で、紙や筆記用具も不足するなかでの在宅学習だった。

コーヒー農場での労働では思ったようにお金がたまらず、その後戦争がはじまり、ほとんどの移民は帰国できず、国に残した肉親に二度と会えなかった。

それから約100年後、私を含む日本人移民の子孫の多くは出稼ぎや留学などの理由で祖父母の国、日本に住んでいる。そして祖父母の時代とは異なり、交通手段も発達した現在、ブラジルとの行き来はお金と時間があれば、自由にできるようになったーはずだった。

ところが2020年５月末現在、私たち一家は多くの在日外国人のように、家族が住む故国にいつ帰国できるか見通しが立たないでいる。ブラジル人としてブラジルに入国はできるが、日本は新型コロナウィルスの影響で外国人の入国禁止措置をとっているので、外国籍の私たちは一度日本を離れれば、いつ再入国できるか分からない。日本には仕事や学校があるので、いま海外に行くことはできないのだ。（追記：６月初旬、日本政府は、外国の親族が危篤になったり亡くなったりした場合など、人道上配慮の事情があれば、外国人の再入国を認めると発表した。）

ただ手紙の往復に数カ月かかった祖父母の時代とは異なり、現在はスマートフォンアプリなどで相手の顔や様子を見ながら直接会話ができる。先日も母と話し、両親が暮らすサンパウロ州の小さな田舎町にも新型コロナウィルス感染者がでたこと、感染し一時期は重体で人工呼吸器につながれた親戚が退院できたことなどを知った。

そのときふと、母が教えてくれた九九はいま娘が習っている九九と同じか気になったので尋ねてみた。私は母のおかげでかけ算には困らなかったが、日本語の九九は忘れてしまっていたのだ。「８ｘ７＝５６、９ｘ６＝５４…」と日本語で唱えるほうが簡単であるにもかかわらず、いまではポルトガル語で「8 x 7 = 56、9 x 6 = 54…」と唱えてしまう。母が覚えていたのは「１ｘ１＝１、１ｘ２＝２、１ｘ３＝３…」で、娘が習っているのと同じだった。母に九九を教えた祖母は、1920年代に日本の学校に通っているので、現在の九九の覚え方は100年前から変わらないということだろうか。

「学校ではかけ算に苦労しなかったけど、『L』と『R』の違いが分からなくて苦労したのよ」と母。「お母さんの孫（私の娘）も『Laranja（オレンジ）』がうまく言えないのよ。このあいだはポルトガル語のレッスンで、『Arara（コンゴウインコ）』と書くところを『Alala』と書いたのよ」と言うと、母は笑っていた。

（編集部註：エウニセ・スエナガさんは、サンパウロ大学哲学文学人間科学部東洋言語学科（日本語・日本文学・日本文化専攻）卒業、東京大学総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程修了。博士（学術）。ポルトガル語翻訳書に村上春樹の小説等、近刊予定に小川洋子『妊娠カレンダー』。）

ブラジルと日本の文化交流の架け橋に

石黒マリア春代
（ブラジル ソリダリオ 横浜理事）

父は福島県いわき市出身の日本人、母はブラジル人でミナスジェライス出身生粋のミネイラだ。父の方針で日本の教育を学ぶために９歳で来日したが、通った日本の学校ではラテンアメリカ系の外国人は私が初めてだった。

担任の先生は私の父に毎日手紙を書き、私も辞書と手紙を通してクラスメートとコミュニケーションをとる生活が始まった。ある日、男の子がほうきの柄で私を叩いたので、父が学校を訪ね担任と校長先生に苦情を言うことになってしまった。

翌日、校長先生は全校生徒を集め、唯一のブラジル人の私を紹介し、「マリア」が日本語と日本文化を学ぶのを手助けするよう説いてくださった。その時は、私は校長先生が何を言っているのか理解できなかったが、会場を出る時には、私へのサポートに協力をしようと皆が集まってくれた。その結果、沢山のお友達ができ、一年間で日本語をマスターすることが出来た。

現在、二児の母である私は会社勤めと子育てで忙しい日々を過ごしているが、並行して鎌倉市でブラジル紹介イベントを主催したり、横浜では「ブラジルソリダリオ横浜」のボランティア活動をしている。日本の文化をブラジルへ、ブラジルの文化を日本へ、と双方向の発信をしたいと思うからだが、なによりも、私の両親と私と兄を歓迎してくれた日本社会への感謝の気持ちと、日本に住むブラジル人とブラジルを恋しく思う方達の気持ちを伝え広めたいからだ。

子供からお年寄りまで、二国の文化を忘れることなく、ブラジルの心を持ちながら日本で心地よく生活ができたら幸いだ、というのが私の願いである。

そんな私の活動の例を書いておくと、2018年3月10日に初めてのブラジルイベント『Rio To Tokyo@Kamakura』を開催した。これは、リオ・オリンピックが開催されたサンバの国ブラジルから、東京オリンピックが開催される2020年に向けて、鎌倉で、いろんな国々の人々と音楽・料理・踊りを共に楽しむイベントであった。

2019年９月１日には、日本人ブラジル移民である我が父へ感謝の意を伝えるべく、ブラジルの名門サンバカーニバルチーム「アギア・デ・オウロ」を招き、本場のサンバに魅了された楽しいイベントを開催した。

さらに、2019年11月24日には、JICA横浜で開催されたパネルディスカッション「Viva! 111 de Yokohama　横浜で祝おうブラジル日本移民111周年」でパネラーの一人として父親のブラジル移民の話をすることができた。

私としては、ブラジルと日本の文化交流の架け橋として微力ながら活動を続けていきたいと思っている。

ジャーナリストの旅路

コロナ禍の東京に見えたリオ

渡邉雅弘
（共同通信ニュースセンター整理部委員、前リオデジャネイロ支局長）

これを書いているのは新型コロナウイルスの緊急事態宣言下である。歩行者がまばらな渋谷のスクランブル交差点、多くの店が閉まった新宿・歌舞伎町…。連日報じられる人けのない東京の空撮映像やルポを目にするたび、ブラジル・リオデジャネイロでの出来事を思い出す。

ある日曜日、セントロ地区を訪れた。平日とは一変、人通りが絶え、開いている店舗もない。週末のセントロは危険だという話は聞いていた。メトロの駅から地上に出た瞬間に異様な雰囲気を感じた。しかし甘く見ていた。

ふと見かけた若者の姿を、しばらく歩いた先で再び見つけたときには遅かった。３人に囲まれ、体を押さえつけられた。スマートフォンをポケットから奪おうとする賊にしばらく抵抗したが、これ以上は危険だと判断して力を抜いた。そのまま走って交番に駆け込んだ。

街の明かりが消えれば、違法薬物の売買や反社会的勢力の伸張など、治安悪化も懸念される。ウイルスにおびえる東京と、休日のリオのセントロが私の中で重なったが、冷静に考えれば、まさか東京で白昼のスマホ強盗のようなことが起きるとも思えない。

振り返れば、リオ五輪を前に、私も含め日本のメディアはブラジルの治安情報を事細かに報じた。事件が起きるたびに、「五輪を前に世界中からの観光客に不安を与えそうだ」などと書き添えながら。

しかし奇妙なことではないか。東京五輪・パラリンピックを前に日本でどんなに凶悪・陰惨な大量殺人事件が起きようとも、訪日旅行者への影響と結びつけることはない。

治安だけではない。大会エンブレムの白紙撤回と再選考、新国立競技場の建設費膨張と再コンペ、招致不正疑惑…。どんなに不祥事が積み上がっても、日本の五輪開催能力に疑問を投げかけるような報道はない。

ブラジルではリオ五輪の前後、大統領の弾劾手続きが行われ、五輪直後に大統領が交代する政治的混乱が起きた。大統領が誰だろうと実際には五輪の成否に影響はなかった。だが、われわれメディアは必要以上に社会的・政治的事象を五輪の開催・運営能力に結びつけてブラジルをおとしめていなかっただろうか。

日本の風景に休日のリオ・セントロを見るとき、苦い思いにとらわれるのは、強盗被害のせいだけではない。

連載 文化評論

財界人にして文化人リカルド・ブレナンを偲ぶ ～もう一人のCovid19犠牲者

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

ニューヨークタイムズも大きく報道

4月26日、財界人としても、文化人としても、重鎮と尊敬されていたリカルド・ブレナン（本名：リカルド・コインブラ・デ・アルメイダ・ブレナン）がレシーフェで亡くなった。新型コロナウイルスの犠牲者であった。彼は1927年生まれなので、享年92歳だった。

ノルデスチ経済界の大物が亡くなったということで、地元紙はもちろんグローボ紙やフォーリャ紙などの全国紙も海外メディアも大きく取り上げていた。例えば、ニューヨークタイムズは4月29日付け記事では、彼の経済人としての面と文化活動への積極的支援者としての面をバランスよく報道していた。さらには、グローボニュース（TV）では、女性レポーター（ベアトリス・コスタ）がリカルド逝去の報道をライブ放映中、感極まって涙にむせぶシーンが流れてしまい、これがまた特ダネニュースとなって別のメディアも報道することになったりもした。このエピソードは、図らずも、故人が人を惹きつけるオーラがあったことを象徴していたといえよう。

ちなみに、今回も、“文化識字率”の低い日本のメディアは、リカルドに関して一行も報道しなかったので、本欄で彼の人物と業績について“義務として”フォローしておきたい。

ブレナン家のフランシスコとリカルド

実業家ファミリーに生まれたリカルドは、地元の最高学府ペルナンブーコ連邦大学工学部を卒業したエンジニアとして、技術面にも経営面にもコミットして家業の維持・拡大・生産性向上・利益率改善に辣腕を振るうことになる。彼が引き継ぎ、業容を拡大した事業とは、ガラス、鋼鉄、セラミック（レンガ・タイル・磁器）、セメント、砂糖、発電（水力・風力）と、実に多様な製造工場群であり、この全体のマネジメントを40年以上も担ったのだから、ノルデスチの経済界においては誰もが一目置く人物として知られていた。とはいえ、新聞やTVといったマスメディアに出ることを好まなかったため、一般社会での知名度は高いものではなかった。

彼が本業と並行して熱中したのが、コレクターという趣味だ。欧州を主体とする海外出張の度に、大量に購入したのが、小型ナイフから始まって刀剣類、甲冑、鎧といった金属製の骨董品、さらには絵画（風景画や裸婦画を好んだ）で、その次に収集したのが、17世紀のオランダ占領期（オランダがノルデスチを支配していた時期）の風景画家として傑出していたフランス・ポストの作品群であった。

◀フランス・ポストのペルナンブーコ風景画

このように文化財収集家としても活躍していたのだが、彼のコレクターとしての評価が正当に確立するようになるのは、実は彼が70代になってから（すなわち2000年代以降）にすぎない。

というのも、彼の出身ファミリー、ブレナン家で知名度が圧倒的に高かったのは、従兄弟のセラミック芸術家フランシスコのほうであったからだ。フランシスコについては弊誌2020年3月号の本欄で追悼記事を書いた通りであるが、ブレナン家のルーツを改めて若干復習しておくと、彼らの5代前となるイギリス人エドワード・ブレナンが鉄道技師としてブラジルに赴任したのが1820年のことで、鉄道網建設の現場で働いているうちにペルナンブーコのサトウキビ農園主の娘と結婚し、こうしてブレナン家がペルナンブーコの名門家系となっていく。5代目まで来て、実業家DNAを引き継いだのがリカルドで、アーティストDNAを開花させたのがフランシスコ、といえようか。

NPO法人IRB博物館の立ち上げ

▲空からみたIRB博物館

1999年、リカルドは事業の中核を成すセメント工場群全てをポルトガルの財閥グループCimporに売却するが、その受領額（5.9億ドル）の一部を使ってNPO法人IRB（リカルド・ブレナン・インスティテュート）を立ち上げるのだ。彼自身の鎧・甲冑・絵画コレクションを所蔵・展示する壮大な博物館を自ら企画し創設したのであったが、この、2002年に落成したIRB博物館が、リカルドにとっても地元社会にとってもエポックメイキング的意味と存在感を有することになる。

このIRBは、広大な敷地内に中世の城を模した展示棟をいくつも配置した、なんとも贅沢なつくりの博物館であり、空調設備など貴重な所蔵資料の保存状態を維持するための科学的配慮はもちろんのこと、さらには訪問者が散策や展示物の鑑賞を楽しめるような様々な“お客様視線”の配慮があちこちに仕掛けられているのが特徴だ。筆者も4回ほど訪問しているが、行くたびに新しい発見があって、また行きたくなる博物館だ。だからこそ、国際的な観光業界誌がIRBを「南米におけるベスト・ミュージアム」と認定したのだ。もはやIRBは、レシーフェの最重要観光スポットの地位を獲得している。

最後に指摘しておきたいのは、NPOとしてIRBが様々な文化活動を財政的に支援しているファクトであり、その一つが、当協会理事の岩尾陽氏が長年献身されてきたOCC(子供市民オーケストラ)という、貧困地区の子供たちを音楽教育を通じて社会に包摂する市民運動である。

我々としてはリカルドの遺徳を地球の反対側からも偲びたいと思う。合掌。

最近のブラジル政治経済事情（外務省中南米局提供情報並びに現地メディア報道他より）

世銀による経済（GDP）成長率予想

6月8日に世界銀行が発表した世界経済調査によれば、新型コロナウイルス感染危機による経済への影響を分析した結果、ブラジルの2020年度GDP成長率予想はマイナス8%と、4月13日発表数字マイナス5%から大幅下方修正となった。経済成長率マイナス8%となれば、過去120年間で最悪の景気後退となる。

2020年の世界全体の平均GDP伸び率はマイナス5.2%と予想されているので、この平均値と比較してもブラジル経済のマイナス成長予想は厳しいものがある。

また、パンデミック危機の緩和サイクルに入るであろう2021年度のGDP成長率については、世界全体の平均予想値が4.2%であるのに比し、ブラジルの経済成長率予想は2.2%となっている。

今年の自動車販売予想

6月6日付けエスタード紙によれば、Anfavea(全国自動車工業会)の今年度新車販売予想は、年初の300万台から167万台へ、と130万台以上も下方修正した。ちなみに、5月の販売実績は4.3万台であったが、これは前年同月比84.4%マイナスであった。

XP Ipespe社の世論調査

5月20日付コレイオ・ブラジリエンセ電子版によれば、XP Ipespe社が5月16日から18日にかけて1千人を対象に実施した世論調査の主な結果は以下の通り。

- **ボルソナーロ政権に対する評価：**「非常に良い／良い」25%（前回…4月末…比2ポイント減）、「普通」23%、「悪い／非常に悪い」50%（1ポイント増）。
- **ボルソナーロ政権の今後に関する見通し：**「ポジティブ」27%（3ポイント減）、「普通」19%,「ネガティブ」48%（2ポイント増）。
- **ボルソナーロの新型コロナウイルス対策に対する評価：**「非常に良い／良い」21%,「悪い/非常に悪い」58%。

「強力にして健全な」農業パワー

総合週刊誌VEJA(5月20日号)は、4ページの特集記事で、ブラジルのアグリビジネス全般が「強いだけでなく健全である」とデータを基に解説している。これによると、ブラジル経済全般（GDP）の2020年度成長率予想はマイナス5%であるが、農畜産部門に関してはプラス2.4%の成長率が予想されており、今年の穀物生産量予想は250.9百万トンと史上最高、なかでも大豆の予想数量120.3百万トンは米国を抜いて世界第一位である。

貿易全般に占める農畜産品パワーをみると、昨年2019年度の輸出総額225 billionドルのうち97 billionドルが農畜産品なので、全体の43%であった。この傾向は、今年に入って一層強まり、今年3月の農畜産品輸出額9.1 billionドル（輸出総額の48.4%）、4月の農畜産品輸出額10.2 billionドル（輸出総額の55.8%）となっている。

キャンパス・コラム

農業立国の過酷さ

武田翔吾
（東京農業大学2020年卒業）

昨年までブラジルのサンパウロ大学に約1年間留学していた。このコラムを書いている本日でちょうど帰国後1年が経つ。私が留学したのは、サンパウロ市から車で2～3時間北上したPiracicaba市にあるESALQキャンパスである。ESALQは農学系専門のキャンパスで広大な面積に畑や温室や牧場が存在し、学生たちは作物学、林学、畜産学などを修める。

私の留学生活も常に畑と共にあった。大学内の畑を運営する学生団体に入っていたほか、北の国境線の町バカライマから南部はサンタカタリーナまで、合計17ヶ所の農村を飛び回ってその土地の農業を学んだ。まさに狂ったように畑を求めていた。

私はそれらの実習の中で、ブラジルの農業は工業的だということを常に感じていた。ブラジルでは畑を持つ人のことをfazendeiroと呼ぶが、そこには「資本家」という響きがある。少なくとも、日本人が聞いて温厚なおじいさんを思い浮かべるような「農家」という言葉とは別物である。彼らは常に作物の種類と栽培にかかる時間・コスト、また得られる利益を吟味し、綿密に計算した上で種を蒔く。農薬会社と交渉し、労働者を雇用し、販路を決定していく姿は経営者そのもので、なかには1日の大半をデスクで過ごすfazendeiroもいるのである。それゆえ畑には独特の緊張感があり、資本主義の原理にこれほど露骨に晒されている農業に私は大きく驚いた。

その背景として好条件の気候や広大な面積によって競争が激しいこと、また政策的方針から農業の保護が薄いことの他に、歴史的な経緯もあると感じた。ブラジルは独立国だが、土地を資本そのものとする考え方や資本家と労働者の関係性などは、植民地時代の厳しさを受け継いでいるように思われた。

一方でそのような過酷な状況下で、様々な工夫を凝らして生き残りを図るfazendeiroの方々には強い尊敬の念を抱いた。また、地域ごとの特性や工夫によって多様に形作られるブラジルの農業は学ぶほど魅力的であった。

私の留学生活は殆ど畑で終始したが、間違いなくこの経験は生涯の財産である。そのような生活が送れたのも私を温厚に受け入れてくれた大学の友人や教授方、また多くの実習を受け入れてくださった東京農大OBの皆様のおかげである。もしこの寄稿文が届くとしたら心の底から感謝を申し上げたい。また、現在ブラジルを脅かすCovid-19の脅威が過ぎ去ることを切に願うばかりである。

新刊書紹介

◆◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆◆

『月刊ラティーナ』
2020年5月号（最終号）

1952年創刊の「中南米音楽」は1983年に改名されて「月刊ラティーナ」となったが、このほど、その68年の歴史に終止符が打たれることになった。最終号には、本田社長の回顧的総括や宮沢和史の特別寄稿、さらには歴代の編集者や常連寄稿者63名からのエッセイ「私の思い出のラティーナ」が31頁も掲載されている。世界の最新音楽文化情報を濃密にフォローしてきた稀有の月刊誌の休刊を悲しむ声はあちこちから聞こえてくる。

（㈱ラティーナ　2020年5月　88頁　700円＋税）

『パンタナール』
（岩合光昭写真集）

合わせて2,000種以上の鳥類･爬虫類･哺乳類・魚類が生息する、生物多様性の宝庫パンタナール。世界遺産にも登録された世界最大の湿原に棲む動物たちを3年半費やして追い続けた動物写真家によるフォトエッセイ集には、ジャガーがジャカレー（ワニ）を仕留めたシーン、カピバラの俊敏な動作、色鮮やかなオニオオハシやアオツラサギがエサをとらえた瞬間、絶滅危惧種のオオカワウソの食事シーンなど、超貴重な写真が収録されている。

（㈱クレヴィス　2020年4月 168頁 3,000円＋税）

『ブラジル法概論』
（阿部博友著）

ブラジルの法制度に関する全般的概説書。第1編では、1988年憲法、刑法･刑事訴訟法、民商法、民事訴訟法・倒産法、企業法・資本市場法、経済法、知的財産法、労働法、についてそれぞれの概要が論述されているが、第2編では経済法の論点（株式会社法、競争法、腐敗防止のための法人処罰法、国際商事仲裁）につき、具体的な判例の事例も含め記述されている。ブラジル固有の法制度の形成過程と捉える著者による、学術書にして実務書だ。

（大学教育出版　2020年3月 234頁 2,800円＋税）

『マルチグラフト』
（神本秀爾・岡本圭史編）

21人の人類学者・研究者による人類学エッセイ集成だが、第一章、安井大輔「見える境界・見えない境界」は、沖縄移民が持ち込んだ沖縄そばが現地化してローカルフードとなったカンポグランデ市のSobáについての論稿だ。1970年代までは沖縄移民が露店にカーテンを覆って、隠れるようにして食べていた沖縄そばが、1980年代以降、非日系の多くのブラジル人住民にも広く受容されるようになり、地域の多元文化を象徴するSobáへ進化した。

（集広舎　2020年2月　310頁　2,182円＋税）

『世界からコーヒーがなくなるまえに』
（P･レッパネン、L･サロマー著）

有機スペシャルティコーヒーの先駆的農場として世界に知られるFAF(フォルタレーザ環境農園)を切り盛りするシルビア・バヘットー家の物語。サンパウロ州モコカ郡で19世紀半ばから続けられたモノカルチャー型農業を2002年からアグロフォレストリー型有機農法に切り替えてきた。家族のルーツは17世紀オランダ支配下のノルデスチへ移住したユダヤ人であり、彼らのファミリー史そのものがブラジル近現代史に重なり合っている。

（青土社　2019年12月　224頁　1,800円＋税）

!!「ブラジルあれこれ」!!

BRASIL para principiantes(2)
-Introdução ao Código Secreto-

5月号に続きケルメン(Peter Kellemen)の著書“BRASIL para principiantes”から、「秘密のコード入門(Introdução ao Código Secreto)」と題する章を紹介しよう。

主人公のパウロ・ケネディーは、パリのブラジル公館で査証取得手続きを終えた後、予防接種の証明書を取得するため公館近くの診療所を訪ねる。そこで彼を迎えたのは、ブラジル（リオ）に20年以上住んだことがあるフランス人老医師のドウトール・アンドレ。この医師が、ブラジルでうまくやっていくコツとして教えてくれたのが、「相手が発するもう一つの言葉を理解すること」であった。彼によれば、ブラジルで成功するためには、1．ポルトガル語を勉強すること、2．それぞれの人が発するもう一つの言葉である「秘密のコード」をよく分析して理解することの二つが必要であるという。具体例としてアンドレ医師は、次のような場面を挙げた。

『君には、ペレイラ氏とのビジネスの結果、1000クルゼイロの貸しがあるとしよう。ある日借金を返してもらうため10:30に彼の事務所を訪れる約束をする。10:30きっかりに事務所に着くが、彼の秘書は、ペレイラ氏は所用でサンパウロに出かけた旨伝える。さて、ここからが「秘密のコード」の出番となる。ブラジルでは、「約束を守らないなんてけしからん。」と言ってここで怒ってしまっては元も子もない。実は、これは、「今は借金は返せない。」というペレイラ氏からのメッセージなのである。後日君がしなければならないことは、ペレイラ氏に会ったら、「約束の当日は交通渋滞で事務所に伺うのが遅くなり、お会いできなくて申し訳なかった。」と言うのが良い。そうするとペレイラ氏は、「11：30まで待っていたが出かけなくてはならなくなった。」と答えるだろう。これで二人の間には「秘密のコード」での会話が成立したことになる。この後のやり取りもこの調子でいけば、お金は100%帰ってくるばかりか、ペレイラ氏を介した新たなビジネスの話につながるかもしれない。』

ケルマンによれば、このようなコードが日常的に使われる背景には、相手に明確に「ノー」と言わないブラジル社会の特徴がある。ビジネスをする際にも、決してすぐにはあきらめず、相手の発する「コード」を理解したうえでうまく対応することが大事だという。

確かにブラジルで生活していると、なかなか思ったように物事が運ばず、担当者はぬらりくらりを決め込んでしまうというようなことが頻繁に起こるので、潔癖な日本人は、「ブラジル人は優柔不断で信用できない。」と決めつけて早々にあきらめてしまうことが多い。しかし、上記のエピソードは、ブラジルの流儀に従い、この少しややこしい儀式に我慢強くうまく付き合うことで、物事が結果的にうまくいく可能性が広がることを示唆している。　(MK)

日本ブラジル中央協会 ―― お知らせ ――

■日本ブラジル中央協会 2019年度（2020年3月期）会員総会の開催

予定通り、２０１９年度の会員総会を開催した。
生憎、新型コロナウイルスの影響で、まだ大勢が集まれる状況にはないことから、例年とは異なり、以下の通りの、こじんまりとした会員総会ではあったが、予定通りの審議を行い、承認された。

日　時：2020年6月18日（木）11:00～12:00
場　所：日本ブラジル中央協会 会議室
出席者：大前孝雄会長、藤村修副会長以下、協会役員７名が参加。
　　また、過半数を大きく超える委任状を頂戴した。

決議事項：第一号議案
　2019年度の事業報告、及び計算書類の承認
　（承認内容は、ホームページの会員専用ページに掲載）
　第二号議案
　2020年度の役員の選任
　合計31名の理事、2名の監事を選任した。
　（詳細は、ホームページの役員一覧の通り）

■春期ポルトガル語講座の開講

例年より、1ヵ月強遅れて５月中旬に開講した。
従来の教室（協会事務所）での受講に加え、本年度より、オンラインでの受講を可能にした結果、現時点では約2/3の受講生がオンラインで受講している。
一部コースについては、引き続き、中途受講生を募集している。
(詳細は、ホームページを参照)
なお秋期講座の開講は、９月中旬を予定している。

法人・個人・学生
新規会員募集中

皆様のご入会を心よりお待ちしております

会員数（2020年6月現在）　法人会員 約115社　個人会員 約400名

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会員特典

1. 協会会報「ブラジル特報」の無料配布
   隔月発行、年6回配布。
2. 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に、参加できます（会員限定イベントへも参加いただけます）
3. 会員交流懇親会へ参加いただけます
4. ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます

年会費

法人会員　1口（2口以上）　20,000円　／　個人会員　1口（1口以上）　10,000円

※入会金は不要です

お申し込み

《日本ブラジル中央協会公式HP》
https://www.nipo-brasil.org　日本ブラジル中央協会　検索

「ブラジル特報」は一部有名書店の店頭でも入手できます。

ブラジル産

最高級プロポリスを

ギューッと 限界までつめこみました。

日本・ブラジルの研究機関で共同研究

ブラジル産プロポリスには有効成分が豊富に含まれています。
ブラジルと日本の各大学で共同研究し、有効性の高い
プロポリスを厳選して使用しました。

カラダを守りたい こんな場面で

いつでもどこでも
気軽にプロポリス。

無香料 無添加

AF-08 プロポリスキャンディー ［25粒入］

価格 1,944円（税込） 送料 200円（税込）

株式会社アマゾンフード
AMAZON FOOD Inc.
〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町 3-1-8-2F

お電話でのご注文 03-5355-7360 受付時間：10時～16時（土・日・祝日を除く）
サイトでのご注文 www.amazonfood.co.jp/shop/
メールでのご注文 info@amazonfood.co.jp

ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を

ブラジルでビジネスや生活をする上で
欠かせないのがポルトガル語です。
BrAsia（ブレイジア）では、
赴任前と赴任後の語学研修を提供します。
「講師任せにはしない」
現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia（ブレイジア） 運営：株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-12 楠本第17ビル5階 TEL03-6263-0716

お問い合わせは E-mail:brasia@kanwajuku.com HP:http://brasia-j.com/

TDB

TRADE & DEVELOPMENT BANK

モンゴル貿易開発銀行東京駐在員事務所

“蒼天よりも高く”

突き抜けるような雲ひとつない青い空 ― 蒼天（そうてん）
モンゴルは蒼天の国です。そのモンゴルでリーディングバンクとして活躍している
銀行がTDBです。日本とモンゴルの間の貿易・投資に関わる貿易金融や
外国為替を取り扱っています。私たち東京駐在員事務所はモンゴルの蒼天につながる
日本の玄関口です。日本のお客様からのご相談をお待ち申し上げております。

モンゴル貿易開発銀行東京駐在員事務所

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-4-1
丸の内永楽ビル2303
TEL：03-4588-3945
FAX ：03-4588-3947

http://tdbm.jp/ 詳しくはコチラ➡

◎最寄り駅：東京メトロ東西線大手町駅B1出口直上

NIPPON STEEL

新日鉄住金は日本製鉄へと社名が変わりました。